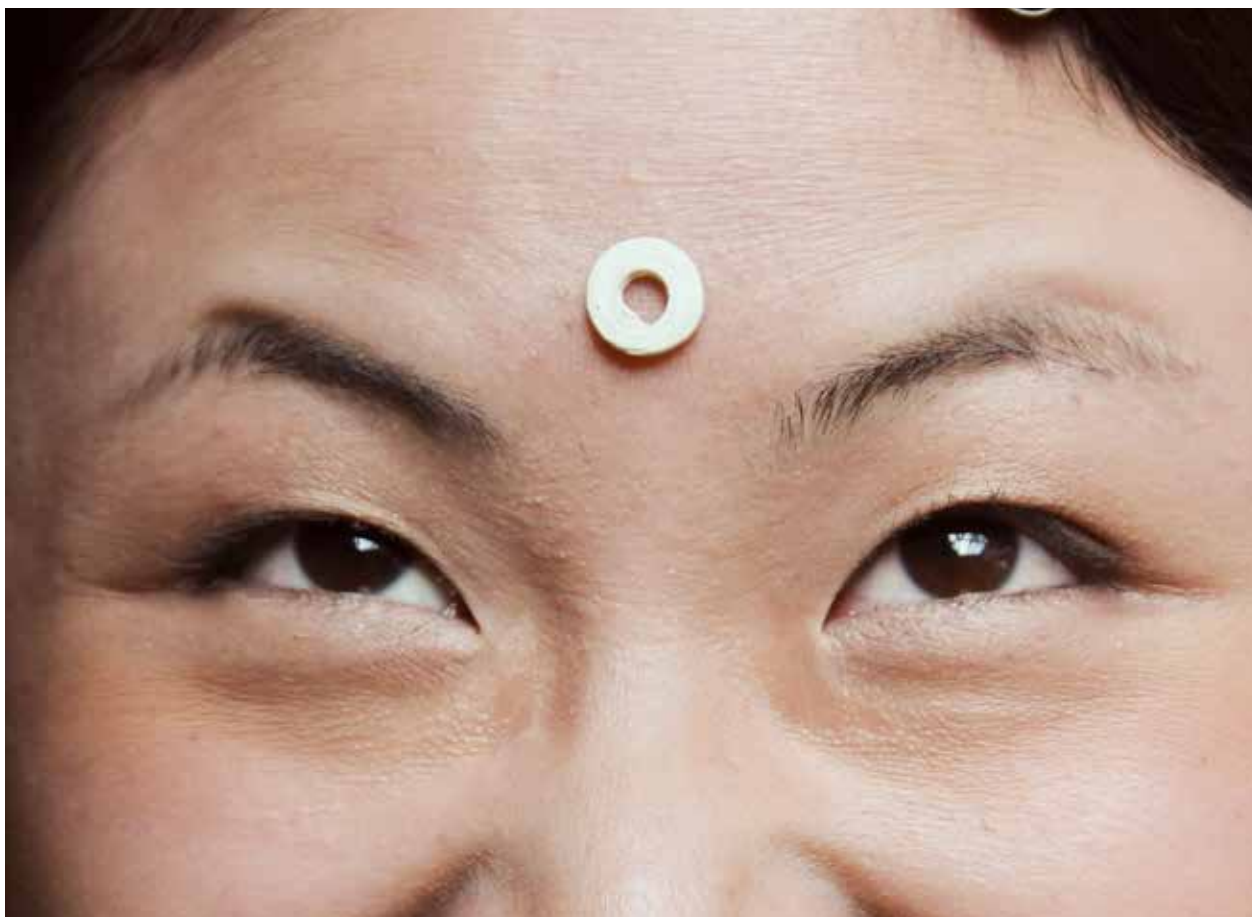


ひたちなか 埋文だより 42



三反田蛭塚貝塚のマガキガイ製小玉垂飾 マガキガイと呼ばれる、イモガイに似た貝の殻を素材とする小玉が、三反田蛭塚貝塚から検出されました。縄文時代後期のものでしょうか、時代を経てもなお白色が鮮やかです。貝殻の頂に近い螺塔^{らとう}という部分を切り取り、表裏面を磨いて製作されています。近くからは、イモガイを素材とする小玉も出土しました。どちらも直径6～8mmほどの大きさで、耳飾りか、首もしくは胸飾りの一部と考えられます。額^{ひたい}に貼り付けて使用したものではありません。念のため。

(2014.8.31 撮影 博物館実習 「女子大生と装身具」第5弾)

CONTENTS

第12回企画展 古墳時代前期のひたちなか／公開講座「ひたちなか市の考古学」第8回

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第14回 那珂町の遺跡の調査 (川崎純徳)

実験報告 十王台式土器が焼けてから—土器の煮沸実験に窺う炉石の機能— (鈴木素行)

資料紹介 市毛遺跡採集の土製品 (斉藤 新) 横穴墓を歩く⑬ 合張横穴群 (坂本和也)

ひたちなか市内の発掘調査 2014 1ケース・ミュージアム34 日立からきた砥石

1ケース・ミュージアム35 市内遺跡の調査 2014 ひたちなか市の古墳⑤ 虎塚古墳群

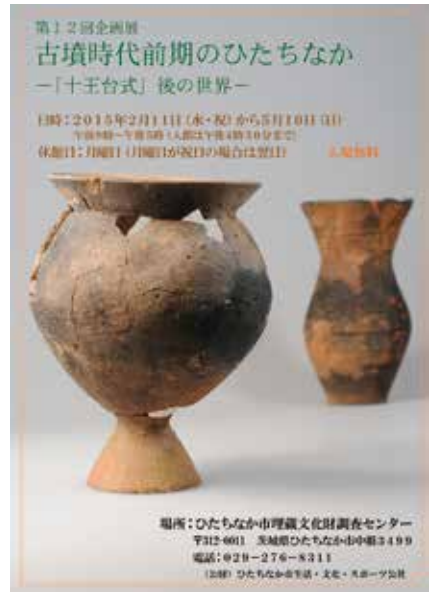
歴史の小窓⑭ 床下のお金 虎塚古墳花便り⑭ ユキノシタ ほか

第12回企画展

古墳時代前期の ひたちなか

—「十王台式」後の世界—

2015年2月11日(水・祝)～5月10日(日)

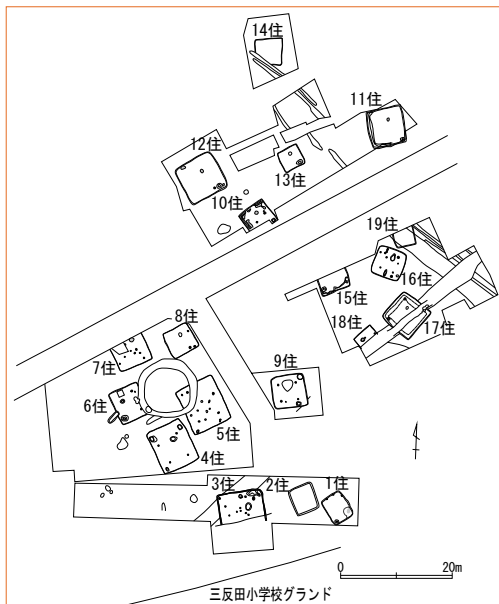


二〇一二年度に開催しました、第一〇回企画展「旅する「十王台式」」では、茨城県北部の弥生時代後期後半についての紹介を行いました。今回の企画展は、副題で「十王台式」後の世界」としましたように、その次の時代である古墳時代前期の世界を対象としました。

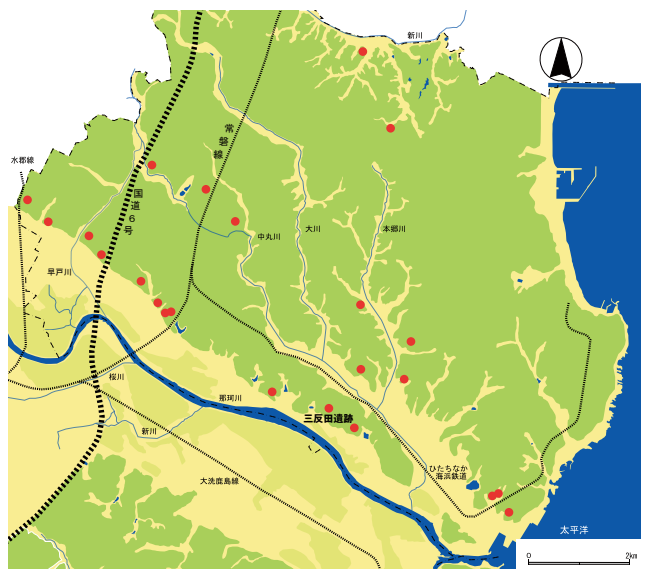
ひたちなか市内には、古墳時代前期の遺跡が二三箇所確認されており、その中には弥生時代から古墳時代への過渡期を知る上で注目すべき遺跡があります。それが今回の展示の中心としました三反田遺跡です。

三反田遺跡 三反田遺跡は、市内を流れる那珂川を臨む台地縁辺部に位置しています。一九七七年から九一年にかけて五回の調査が実施され、住居跡一九基が確認されました。出土遺物には、南関東系の網目状捺糸文や櫛描波状文を施文した壺輪積口縁台付甕、東海西部系のS字状口縁甕、東海東部の「大廓式」の壺などがあり、これらの土器は他地域から持ち込まれたもの、またはその特徴を有するものであることが特徴です。今回、改めて資料を整理した結果、破片ではありますが、器表面にタタキ目のある「畿内系」と思われる甕の存在を確認しました。また、発掘調査で出土した土器の中には、地元の「十王台式」が一点も含まれていないことも再確認しました。

以上のように、当遺跡は地元の「十王台式」がなく、他地域の特徴を有する土器を主体とする集



三反田遺跡遺構配置図

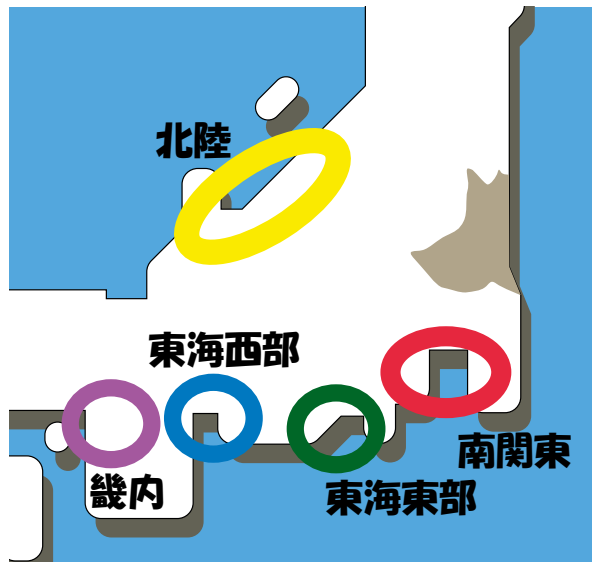


ひたちなか市古墳時代前期遺跡分布

落跡であることが重要な点です。また、当遺跡周辺には弥生時代後期後半の集落が確認されていないことから、集落のない空白地域に「移住」という形で遺跡が形成されたと考えられます。移住してきた集団は、新しい灌漑技術かんがいをもち、既存の小



「タタキ甕」例：市原市中台遺跡



茨城県に入ってくる土器の地域

谷津ではなく、手つかずで残されていた肥沃な那珂川流域の低湿地の開拓を行ったと考えられます。また、遺跡が立地する那珂川河口域は、江戸時代の例からも水上交通の重要な要衝と考えられるので、三反田遺跡の台地の下に「津」の存在が想定できます。それを裏付けるかのように、三反田遺跡の台地下の三反田上河原遺跡かみかわらには、古墳時代前期の可能性のある丸木舟が二艘ふね、確認されています。

移住者の痕跡 三反田遺跡のように、県内の古墳時代前期の遺跡からは、様々な地域の土器が出土しています。那珂市森戸遺跡もりどでは、「豪族居館」とされる堀が確認され、その堀からは多くの完形に近い状態の土器が出土しています。これらの土器は、その出土状況から単なる廃棄行為ではなく、意図的に投入された可能性が考えられます。土器の器種には、甕、二重口縁壺、高杯、器台などがありますが、特に甕が主体を占めます。甕は個体差が少なく、その多くが口縁部が「く」の字状に屈曲している球胴平底の甕で、胴部にハケ目やナデ調整がみられます。これと同じような甕は、茨城町下郷遺跡しもこうでも出土しています。これらの甕は、千葉県南部地域を故地とする土器で、森戸遺跡から出土したものは胎土や器形などから、当地域から持ち込まれた可能性があり、注目されます。

土浦市東谷遺跡第一号住居跡から出土した土器は、口唇部の面取りが特徴的で、「く」の字状の口



北陸系の土器群：土浦市東谷遺跡第1号住居跡



千葉県市原市下鈴野遺跡



那珂市森戸遺跡

茨城県から出土した千葉県南部地域の土器例

縁部や肩部がやや張った形態などから、北陸東部地域の甕の形態に類似しています。ただし、甕の胴部がやや球胴化していることや、平底ではなく台付である点など、オリジナルではなく変容しています。また、同じ住居跡から出土した受部が大きく突出する器台も、北陸系の装飾器台に由来するものの可能性が考えられます。土浦市には鳥山遺跡といった前期の玉作りの遺跡が確認されています。弥生時代から玉作りが盛んに行われた地域は、出雲や北陸地域とされていますので、東谷遺跡の土器を使用していた人たちは、玉作りの遺跡と関係があるかもしれません。

古墳時代のはじまり 以上のように、古墳時代前期には、様々な地域の人々の痕跡がみられます。では、移住者と地元との関係はどうだったのでしょうか。

三反田遺跡から出土する土器からは、当遺跡が地元と遠隔地の物資を交易する拠点、つまり「市」としての役割を担っていたのではないかと推測されます。「市」は、移住者と地元との出会いの場であった可能性も指摘されており、当事者同士の結びつきは、遠隔地の集団を同族(親戚)化させていたのではないかと思われまます。三反田遺跡近隣の鷹ノ巣遺跡第二六号住居跡からは、「十王台式」と土師器が並んで出土していますが、この事象が先記の同族化を示しているようにもみえます。

移住者と地元との関係について、もう一つ手が



鷹ノ巣遺跡第26号住居跡遺物出土状況



鷹ノ巣遺跡



日立市吹上遺跡
無文様の壺

かりがあります。それが鷹ノ巣遺跡や吹上遺跡で出土している、無文様で「十王台式」のような形をした壺です。この壺は、移住者が土師器の技法で「十王台式」を真似て作成した可能性が指摘されています。よって、土器からは、移住者が地元に寄り添う状況が窺えます。移住は、武力的な制圧ではなく、「十王台式」の人々との平和的な融合だったのではないのでしょうか。このような状況が、当地域の古墳時代のはじまりと考えます。



方形周溝墓から出土した土器

また、三反田遺跡と同じ台地上にある下高井遺跡では、方形周溝墓といわれる墓が四基確認されています。移住者たちは、このように新たな墓制も持ち込んでいます。そして、ひたちなか市にも、高い墳丘を持つ古墳が出現することになります。

(稲田健一)



今回の企画展の開催及び本誌への記事の掲載にあたっては、以下の機関及び関係者からご指導とご協力をいただきました。
石岡市教育委員会・市原市教育委員会・市原市埋蔵文化財調査センター・茨城町教育委員会・上高津貝塚ふるさと歴史の広場・つくば市教育委員会・土浦市教育委員会・那珂市歴史民俗資料館・日立市郷土博物館、猪狩俊哉・石橋 充・梅田由子・黒澤春彦・小林佳南子・鈴木正史・鶴岡英一・中嶋圭子・仲田昭一・三井 猛・谷仲俊雄 (50音順・敬称略)

公開講座「ひたちなか市の考古学」第八回 古墳時代のはじまりを探る

平成二十七年二月二日から三月一四日の毎週土曜日に、公開講座「ひたちなか市の考古学」八古墳時代のはじまりを探る」を開催しました。講師には、古墳時代前期の研究者をお招きして、最新の研究成果をもとに、古墳時代のはじまりの謎に迫りました。

なお、今回の講座の内容については、後日、記録集を刊行する予定です。



月/日	演 題	講 師
2/21(土)	ひたちなか市の古墳時代のはじまり	(公財) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 稲田 健一
2/28(土)	房総と古墳のはじまり —弥生の風、古墳の路—	市原市埋蔵文化財調査センター 小橋 健司氏
3/7(土)	群馬県地域における古墳時代のはじまり	群馬県教育委員会 深澤 敦仁氏
3/14(土)	古墳時代のはじまりの社会 —水稲農耕文化とはなにかを考える—	東海大学 北條 芳隆氏

市原市埋蔵文化財調査センター
小橋 健司氏



群馬県教育委員会
深澤 敦仁氏



東海大学
北條 芳隆氏



「弥生終末期に活発化する地域間交流の背景には、環境的な要因もあったようです。古気候データは、北陸南西部から東京湾岸への移住は寒冷化がブッシュ要因であったことを示唆しています。古墳時代に至る過程は、気候変動も視野に入れて考える必要があります。」

「東海地方の技術やスタイルを、群馬県地域の人たちが模倣して自分たちのものにすることによって、「石田川式土器」が成立したのではないのでしょうか。おそらく、三反田遺跡から出土しているS字甕も、群馬県と同じような背景をもつ土器と考えられます。」

「特産品というものは、他との関係で発見されます。何が特産品かを発見させるため、たくさんのコメを持って行って、その地域でしか出来ないモノ（特産品）と交換する。そうすることで、古墳時代のはじまりの頃、日本列島のかかなり広い範囲に一つの経済圏ができあがっていったのではないかと考えています。」

歴史の小窓 その一四

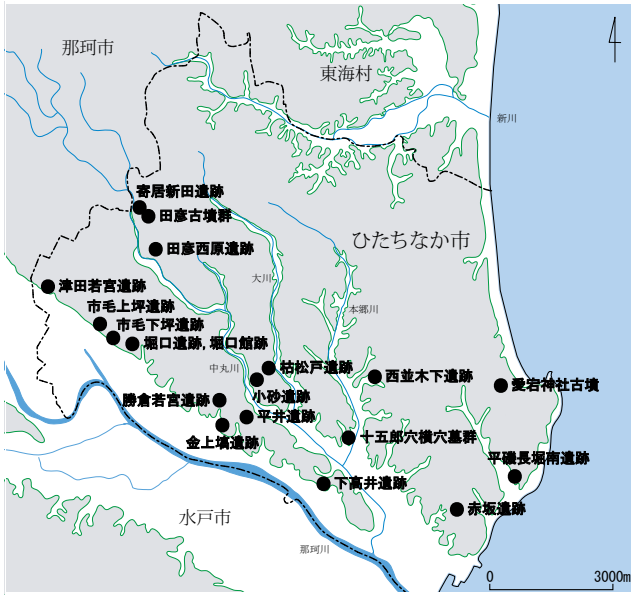
床下のお金



ひたちなか市武田西
塙遺跡第一八五B号住
居跡での調査最終段階
のこと、土間を掘って
いたら、床下から逆
さに置かれた杯が出土
し、その下からお金が出てきました。床に
穴を掘って銭貨を埋納し、穴の上に杯を伏
せ置いたように見えたが、その穴はよ
く確認できませんでした。出土した銭貨は
皇朝十二銭の「延喜通寶」でした。

なぜ床下にお金埋納されたのでしょ
う。深澤靖幸氏は、こうしたお金は竪穴住
居を造る際の地鎮具で、陰陽道の知識を持
つ宗教者により祭祀が実修され、またそう
した宗教者が、様々な呪具を携えていたの
ではないかという注目すべき見解を述べら
れています。竪穴住居跡から時々出土して
調査者の頭を悩ませる、銭貨や腰帯具、ガ
ラス玉といったいわゆる「珍品」の類は、
もしかすると地鎮めに用いられた鎮物だっ
たのかもしれない。（佐々木義則）

参考文献 深澤靖幸二〇〇〇「古代東国の竪穴建物と銭貨」『府
中市郷土の森紀要』第一三号



二〇一四年度は、ひたちなか市内においては市内遺跡調査のほか、十五郎穴横穴墓群の発掘調査がありました。市内遺跡調査では、下高井遺跡の試掘調査で、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡が多数確認され、当遺跡の広い範囲に住居跡が密集して残されていることがわかりました。十五郎穴横穴墓群の発掘調査は、今年度は横穴墓の構造を明らかにするための調査を実施しました。六基の横穴墓の調査によって、横穴墓のさまざまな構造を記録することができました。今回の調査を含め、これまで実施された十五郎穴横穴墓群の調査成果は、来年度報告書としてまとめられる予定です。

(佐々木義則)

2014 (平成 26) 年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	回数	所在地	時期	種別	調査内容
1	しもたかがいせき 下高井遺跡	5 次	三反田	4 月	試掘	住居跡 50 基 (古墳～平安), 土坑 28 基 (中世 1 基, 他は時期不明), 溝 9 条 (時期不明), ビット 20 基 (時期不明) を確認。縄文土器, 敲石, 土師器, 須恵器, 瓦質土器, 内耳土器が出土。
2	ほりぐちいせき 堀口遺跡・堀口館跡	16 次・1 次	堀口	4 月	試掘	住居跡 1 基 (平安), 堀跡 1 条 (時期不明) を確認。土師器が出土。
3	こささいせき 小砂遺跡	4 次	小砂町	5 月	試掘	なし
4	つだわかみやいせき 津田若宮遺跡	9 次	津田	5 月	試掘	溝跡 1 条 (時期不明), 道跡 1 条 (時期不明) を確認。土師器が出土。
5	かたまついせき 枯松戸遺跡	4 次	中根	5 月	試掘	なし
6	にしなみきしなせき 西並木下遺跡	1 次	馬渡	5 月	試掘	縄文土器が出土。
7	いちぎかみつぼいせき 市毛上坪遺跡	14 次	市毛	6 月	試掘	住居跡 1 基 (古墳), 土坑 1 基 (時期不明) を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 近世陶器が出土。
8	あかさかいせき 赤坂遺跡	2 次	赤坂	6 月	試掘	なし
9	かつくらわかみやいせき 勝倉若宮遺跡	4 次	勝倉	6 月	試掘	住居跡 10 基 (古墳 4, 奈良・平安 6), 溝 3 条 (時期不明), ビット 1 基 (時期不明) を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器が出土。
10	つだわかみやいせき 津田若宮遺跡	10 次	津田	7 月	試掘	溝 1 条 (時期不明), 土坑 1 基 (時期不明) を確認。遺物なし。
11	いちぎしもつぼいせき 市毛下坪遺跡	11 次	市毛	8 月	試掘	住居跡 4 基 (平安), 溝 1 条 (時期不明) を確認。土師器, 須恵器, 敲石が出土。
12	たびごこふんぐん 田彦古墳群	1 次	田彦	10 月	試掘	なし
13	かみあはせわいせき 金上埴遺跡	8 次	金上	11 月	試掘	住居跡 2 基 (奈良・平安 1, 時期不明 1), ビット 9 基 (時期不明) を確認。縄文土器, 土師器, 須恵器が出土。
14	たびごにしほらいせき 田彦西原遺跡	1 次	田彦	11 月	試掘	なし
15	ひらいいせき 平井遺跡	2 次	金上	12 月	試掘	住居跡 1 基 (縄文), 溝 1 条 (時期不明) を確認。旧石器, 縄文土器, 須恵器が出土。
16	ほりぐちいせき 堀口遺跡	17 次	堀口	1 月	試掘	住居跡 17 基 (弥生 1, 古墳 4, 時期不明 12), 土坑 2 基 (時期不明), ビット 9 基 (時期不明) を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器が出土。
17	ひらいせきがほりあなみいせき 平磯長堀南遺跡	1 次	平磯町	2 月	試掘	溝 1 条 (時期不明) を確認。遺物なし。
18	あたごじんじきこふん 愛宕神社古墳	1 次	阿字ヶ浦町	2 月	試掘	なし
19	よりいしんでんいせき 寄居新田遺跡	1 次	田彦	3 月	試掘	なし
20	つだわかみやいせき 津田若宮遺跡	11 次	津田	3 月	試掘	なし

市内の古代集落跡を調査すると、多くの砥石が出土します。その石材は白色流紋岩と明褐色・青灰色変成岩がほとんどです。変成岩製の砥石は石材の特徴から、日立市産の変成岩であることが判明しています。今回は、その日立産変成岩製砥石を展示いたしました。

古墳時代から平安時代にかけて大量に流通した日立産の砥石ですが、なぜか古代の記録に残



展示のようす



日立市産変成岩製砥石

で、鉱物が抜けた多数の小さい穴を持っていきますので、風化が見て取れます。日立市南東部を流れる小河川の河床堆積物には、このように風化した結晶片岩の転石が数多くみられますから、こうした転石を砥石に加工した可能性が高いと考えられます。

では拾ってきた河床転石を砥石に加工した遺跡はどこなのでしょう。加工場跡は発見され

ていませんが、石材の採取地域からみて、古代久慈郡東部の助川郷・箕月郷あたりの集落で加工されていた可能性があります。ひたちなか市武田遺跡群では、古墳時代前期から日立変成岩製砥石が出土しますので、日立地方では、古墳時代前期からの砥石づくりの伝統が奈良・平安時代の村々にまで息づいていて、鉄製品の普及に合わせ、変成岩製砥石の大量生産が始まったのだろうと思われれます。

砥石の交易地は、箕月郷の南に隣接する久慈郡高市郷にあった可能性があります。志田諄一先生は、郷名からみて、そこが市の開かれた場所であると考えました。高市郷は水運（久慈川）と陸運（駅路）が交わる所です。日立の砥石生産地がこうした交易地に近かったことはとても重要なことでしょう。

日立変成岩製砥石は出土資料からみると、常陸国多珂郡・久慈郡・那賀郡といった、現在の茨城県北半部に、八世紀から一〇世紀にかけて多量に流通したようです。一一世紀以後の様相は現在よくわかりません。ただし、近代の砥石生産遺跡は諏訪の山中に残っています。

捨てられた砥石も郷土の過去の暮らしを語る貴重な資料です。天然砥石の歴史はわからないことだらけです。その解明は、きっと多くの埋もれてきた歴史を、私たちに教えてくれるに違いありません。

(佐々木義則)



されることはありませんでした。古代のさまざまな産物を記した「常陸国風土記」にも、砥石の記述は出てこないのです。国衙への貢納品ではなかったためなのでしょう。

砥石に使われている石材は、日立変成岩の鮎川層に分布する千枚岩や結晶片岩といった岩石です。日立変成岩類の鮎川層は、神峰山付近から南側、日立市南東部山麓に分布します。

千枚岩製砥石は黒味を帯びた暗青灰色で、千枚岩という名前の通り、薄く何枚

にもはがれる性質をもっています。その岩石は日立市諏訪梅林や下流の鮎川河床部に露出していて、鮎川河床の転石にも多く含まれています。そうした石が採取されて砥石に加工されたのでしょうか。

なお、日立変成岩製砥石の多くは結晶片岩製砥石です。岩石は淡緑色ですが、風化により褐色味を増します。出土した砥石は白褐色

ひたちなか市には三二六の遺跡があります。遺跡に住宅やアパートなどが建築される際には、国費補助事業として事前の試掘調査を実施しています。こうした調査は、市内のどこかで毎年一五〜二〇件ほど実施されています。試掘調査によって住居跡などの遺構が確認され、その保存が難しい時には、発掘調査が行われます。今回のワンケース・ミュージアムは、平成二六年度に実施された発掘調査から、とくに堀口遺跡第一五次調査を取り上げました。堀口遺跡は市内堀口地区に残る、弥生時代から平安時代に営まれた集落跡です。その遺跡内に個人住宅が建つことになり試掘したところ、住居跡が存在することが判明したため、地権者様のご協力をいただいて発掘調査を実施しました。埋蔵文化財の調査は、地権者様はじめ、市民の皆様のご協力とご理解のもとで実施することができます。このように多くの人々の力が集まって、

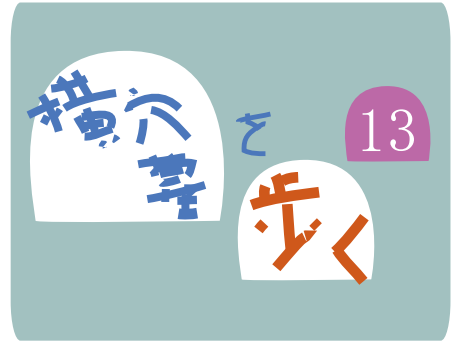


展示のようす

すこしずつ郷土の歴史を明らかにすることができるとのことです。調査は、平成二六年の二月から三月にかけて行なわれ、竪穴住居跡が四基見つかり、土器や鉄製品も出土し、堀口遺跡解明への貴重な資料が追加されました。今回の調査では、平安時代（九世紀第二四半期頃）の第三号住居跡から出土した土器の破片に、「武田新」という墨書が見つかったことが注目されます。古代の武田郷を示すと考えられる「武田」の下に書かれた「新」は、いったい何を示しているのでしょうか。展示では、調査地の字名「新地」の略称かと考えましたが、他の遺跡で出土した墨書土器の事例などを踏まえながら、今後十分に検討をする必要があると思われる。（佐々木義則）



土器の煮沸実験？ (2014.9.20)

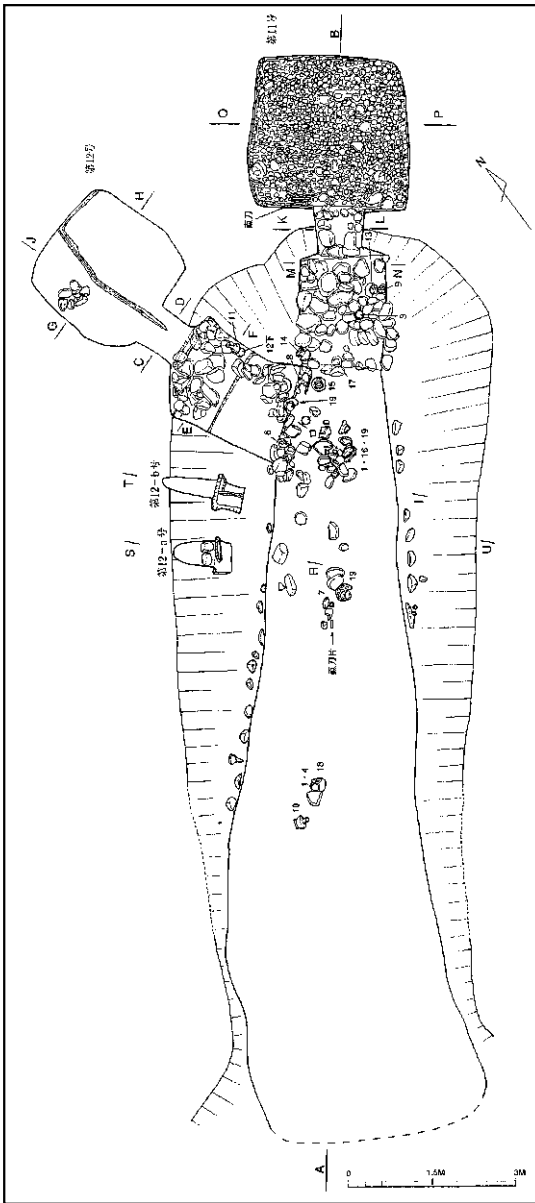


福島県双葉郡楢葉町
がつぱり
合張横穴群

坂本 和也

(楢葉町教育総務課)

合張横穴群の所在する福島県双葉郡楢葉町は、震災により今も避難指示区域内にあるが、JR常磐線竜田駅が、現状での北限の駅ながら昨年六月に再開され、復興の槌音が響く、いわば浜通り地方復興の前線基地となっている。



合張横穴群第11・12号墓実測図

合張横穴群は、そのJR竜田駅の南東約二kmの北田字合張地内に所在（従来、下山根横穴群と記載されるが、調査にあたって正しい小字名の合張横穴群が採用される）し、木戸川沖積地の北側に迫る双葉第三段丘の南斜面に形成されている。同じ第三段丘は太平洋側に至ると海蝕崖となるが、荒海に接する位置には、天神原遺跡が所在する。また、当町は、凝灰質砂岩の丘陵斜面に多くの横穴群が知られ、当地域の特色の一つとなっている。合張横穴群の調査は、一九八五（昭和六〇）年に町史編纂事業に伴って着手され、東群と西群の二群からなる横穴群であると解明された。調査は、横穴群中最大の前庭部を有する第一号横穴と、これに付随する第二号横穴に対して行われた。結果、第一号横穴の総長は一九・三mを測る特異なつくりであることがわかり、玄室の平面形は正



合張横穴群第11・12号墓調査風景

方形に近く、加えて、前庭部から出土した直刀などから垣間見える追善祭祀の在り方などから、いわき市中田横穴との類縁性も指摘されている。入口付近に置かれた土師器・須恵器類から築造は六世紀末頃と思われる。第一二号横穴は七世紀前半の築造年代が考えられ、第一号横穴との血縁的性格の強い家族墓が想定されている。

また、合張横穴群の被葬者像については、調査者により、その立地から木戸川の「津」を管理運営した部民の一集団との考えも提言されている。

ひたちなか市の古墳

5 虎塚古墳群

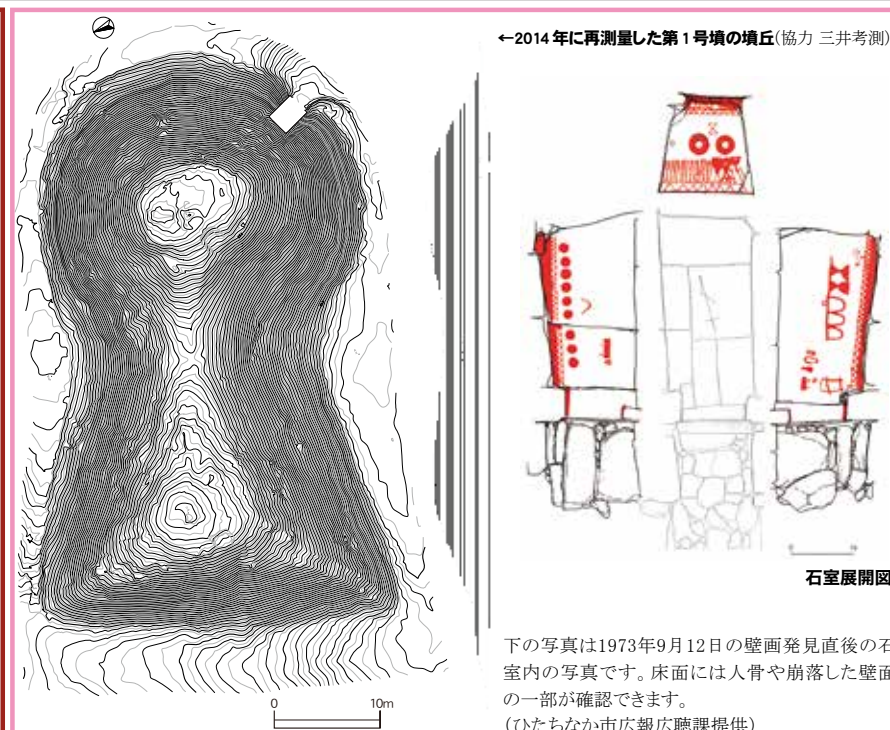
虎塚古墳群は、東水戸道路ひたちなかICの西側、標高約20mの台地上に位置しています。現在、前方後円墳1基と方墳2基、円墳1基、墳形不明1基の計5基を確認できますが、この他に古墳1基の存在が記録されています。調査は、第1号墳が1973～76年に、第2号墳が2007年に、第4号墳が1986・87年に実施されています。

第1号墳は装飾古墳で有名な所謂「虎塚古墳」です。墳形は前方後円墳で、全長56.5m、後円部径32.5m、前方部前端幅38.5m、後円部高さ7.5m、前方部高さ7.2mを測ります。墳丘に埴輪の樹立はありませんが、前方部墳頂部からは須恵器の大甕の破片が出土しています。埋葬施設は後円部の盛土内に位置し、凝灰岩の切石によって組まれた横穴式石室です。出土遺物には、大刀や鉄鍬などがあります。石室の壁面には円文や三角文といった幾何学文様と、大刀や鞍・馬具といった武器・武具類が描かれており、一部の文様は線刻と彩色を併用する技法がみられます。このような文様や技法は、熊本県菊池川流域の装飾古墳の特徴に類似していることから、その地域との関連が考えられます。

第1号墳の次には墳形が方墳へと変化し、削り抜き玄門の横穴式石室を有する第4号墳が造られます。墳形は方墳で、一辺約22mの規模ですが、墳丘の土が失われており、石室がむき出しとなっています。埋葬施設は、半地下式の単室構造の横穴式石室で、奥壁・左右側壁・天井石・床石すべてが一枚石で箱形に構築されています。玄室平面形は長方形を呈し、奥壁は正方形、側壁はほぼ垂直に立ち、奥壁との接点では奥壁の両端がL字状に切り込まれています。玄門部は、一枚石の板石の中央が幅50cm、長さ1mに削り抜かれています。このような玄門構造は県内では他に確認されていないことから、この削り抜き玄門が当古墳の特徴といえます。出土遺物は周溝内から7世紀中葉に比定される須恵器が出土しています。第3号墳も方墳で、第4号墳と同様な横穴式石室の存在が確認されています。

第2号墳は十五郎穴横穴墓群館出支群直上に位置しています。墳形は台地縁部に平行する軸がやや長い楕円形状です。墳丘規模は南北約15.5m、東西約14m、高さ1.6mを測ります。周溝は、台地斜面が切れる三日月状を呈しています。埋葬施設は、調査で確認できませんでした。調査による出土遺物は非常に少ないです。横穴墓群のすぐ上に立地することや墳丘・周溝の形状、埋葬施設が確認できないことから、第2号墳は「館出支群の象徴としての墳丘」の可能性がります。

当古墳群は7世紀前葉に築造が始まり、7世紀中葉にかけて形成された古墳群と推定されます。十五郎穴横穴墓群は、調査で出土した土器の時期から7世紀第2四半期には横穴墓が造営されていた可能性があります。そうすると、台地上の虎塚古墳群第4号墳の時期は横穴墓の造営開始時期よりも後となることから、古墳と横穴墓が同時期に造られていたことになります。つまり、虎塚古墳群は十五郎穴横穴墓群と密接な関係にあると思われます。



←2014年に再測量した第1号墳の墳丘(協力 三井考測)

石室展開図

下の写真は1973年9月12日の壁画発見直後の石室内の写真です。床面には人骨や崩落した壁面の一部が確認できます。(ひたちなか市広報聴課提供)



第4号墳

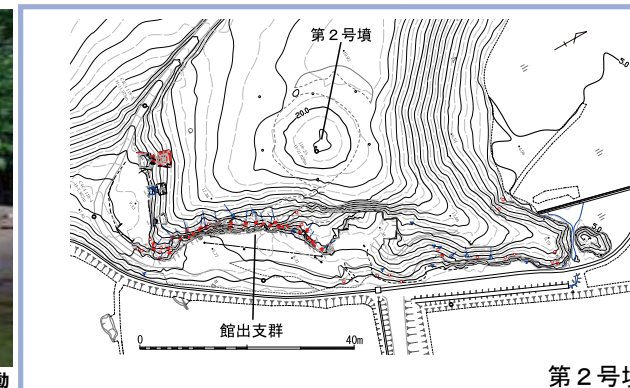
削り抜き玄門部 (矢印)
天井部の石が玄門の石を押し倒している



第1号墳



「ときわ会」による清掃活動



第2号墳



墳丘断面

4世紀 5世紀 6世紀 7世紀



ミニ知識

第1号墳では、地元の「ときわ会」のみなさんが清掃活動を行っており、いつもきれいな史跡公園となっています。古墳は地元の宝とされ、愛され続けています。

見学ガイド

- * 第1号墳の墳丘は自由に見学できます。石室は、春と秋に計16日間公開されます。
- * 第1号墳から出土した遺物は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの標本陳列室に展示しています。
- * 第4号墳は私有地内にあるため、道路から見学してください。

* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

豊喰遺跡の発見 那珂町での忘れられない遺跡に豊喰遺跡の発見がある。勤務していた水戸農業高校の那珂町移転に伴い学校周辺の遺跡踏査により確認したのが豊喰遺跡であった。採集した爪形文土器片と石器を常総台地研究会月例会に持参して報告し、その後、研究仲間の踏査が行われた。茨城県史の編纂中であることもあり資料を公開した。東京大学の佐藤達夫教授や茨城県歴史館の川上博義氏等も踏査に訪れ、採集資料は増加していった。こうした採集資料は常総台地研究会が一括して受け入れることになった。

佐藤達夫教授と発掘調査を検討していたがその前に陸田に造成され湮滅してしまった。勝田市後野遺跡の調査の後、縄文草創期の初期段階の遺跡の調査を目論んでいただけに残念であった。このために額田大宮遺跡が調査対象となったのである。調査は那珂町史編纂の一環として行ったがこの段階で町史編纂はまだ体制が出来上がっていないかった。

町史編纂の本格化 しばらくして町史編纂事業が本格化した。原始古代班が作られ、宮内良隆氏、鈴木素行氏、渡辺明氏、鈴木洋一氏らと担当した。編纂の作業は月一回程度、公民館等の施設で拓本、実測、写真撮影などを行った。那珂町は渡辺氏のフィールドであり、ほとんどの遺跡は渡辺氏が熟知していたし、採集資料も豊富であったので、氏の採集資料と開発にともなう過去に調査され市内の公共施設に保管されていた出土資料

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第14回 那珂町の遺跡の調査



1977(昭和52)年8月 額田大宮遺跡の発掘調査(奥が川崎)



川崎 純徳

の再調査を中心にして資料化の作業を進めることとなった。

さらに町内の収集家を訪ねて資料を渉猟したり、遺跡踏査もできる限り行った。川上博義氏からも資料を拝借した。その中に玉造町捨木遺跡出土の有角石器、那珂町出土の有頭石棒、弥生土器等があった。有頭石棒、弥生土器は渡辺明氏の採集品である。白河内古墳一号墳の測量も宮内氏を軸に行った。

那珂町の遺跡の中には重要な遺跡が多い。町史編纂開始前に知られていた遺跡は縄文草創期の爪形文土器の豊喰遺跡、先石器時代終末期の細石刃を出土する額田大宮遺跡、新地遺跡、装飾古墳の白河内古墳等であった。新地遺跡は佐藤達夫教授によって紹介され広く知られていた。

額田大宮遺跡の発掘 額田大宮遺跡の調査は勝田市後野遺跡の調査の二年後にあたる一九七七年に那珂町史編纂委員会によって小規模な発掘を行った。この調査には水戸農業高校の生徒が参加した。調査範囲は六×六mの小規模なものであったが多くの成果を得ることが出来た。俗に言うトロトロ石(安山石)製の大型の石刃石器群、細石刃群等が集中して検出された。

『那珂町史』(「自然環境・原始古代編」)のほかに『那珂町の考古学』を刊行した。

*川崎純徳氏のプロフィールは、連載第一三回(「埋文だより」第四一号)に掲載してあります。

市毛遺跡採集の土製品

齊藤 新



遺跡からはたくさんの遺物が出土します。手元に採集資料ですがタコウインナーのような形の土製品があります。いつごろ何を意図して作られたのかなど、考古学の世界では理解に苦しむ遺物にも時々遭遇します。遺物をじっくり観察してほかの出土遺物との比較をしたりして可能性を考え、古代人の意図に近づこうとします。

1 遺跡の立地と採集の経緯

今回紹介する土製品を採集した場所はひたちなか市市毛字上坪地内である。那珂川を南に望む標高25mほどの台地上で、小谷津に面する緩く傾斜する概ね平坦な台地の縁辺部である。茨城県が運用するいばらきデジタルマップで確認すると市毛遺跡（遺跡番号005）の範囲内である。一九八一（昭和五六）年発行の勝田市埋蔵文化財分布調査報告書では縄文時代前期・古墳時代と奈良平安時代の集落遺跡と紹介されている。

遺物は筆者が市内に所在する縄文時代の遺跡を訪ね歩いていた一五年ほど前に採集したものである。当時は家庭菜園のような畑がありその道路脇で採集したが、ほかには遺物を採集しなかった。今にしてみると遺物の時期判定の参考になる遺物がほかにあったのかもしれない、詳細に歩けばよかったと思う。

2 遺物の観察

つくりはいわゆる手づくね状であり、粘土の塊を手でこねて成形したと思われる一体成形である。区分はしにくいが平盤部分につまみ部分がついたスタンプのような形をしており、タコウインナーを彷彿させられる。

重量は42.2gである。粘土は比較的緻密であり、微細な砂粒を多く含んでいる。

色調は全体に黒褐色であるが、炭化物を吸収した黒さではない。

大きさは、平盤部分は長径で3.7cm、短径で3.3

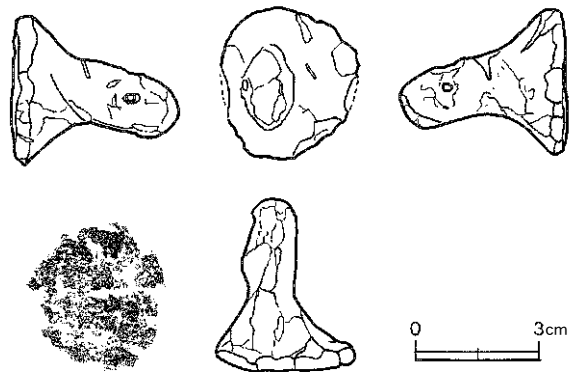


図1 市毛遺跡の土製品

〜0.4cmほどである。つまみ部分は断面が楕円形で、平坦面の中心についているのではなく偏ってついており、またつまみ全体もまっすぐではなく長径にならいやや曲がっている。

表面は粘土が柔らかい状態の時に指先で撫でたと思われるが、平坦部分ではざらついており、指先やヘラでの撫でではなく、ささくれたような表面である。

つまみ部分の上部に貫通した直径2mmほどの孔が一つある。粘土が生乾きで柔らかいうちに棒状のものを引き抜き貫通させたと思われる。孔にスレなどの使用痕はほとんどない。なおこの孔に糸を通して自然な状況で吊ると平坦面がほぼ真下を向く。

cmを測り楕円形である。またつまみの先端部までは平盤部分の外周はやや丸みを帯びており、厚さは0.3

平盤部分の外周は一部欠損していると思われるが比較的残りはよい。平坦面のぎらついた表面状況から、何かがあるいは何かから剥離した可能性もないわけではない。しかし円盤部分の周囲は圧着されていたと判断できる状況ではない。

3 遺物の用途

では、この遺物はなんであろうか。本資料の特徴はおおきく①土製品、②平盤に細くのびる突起がつく形、③平盤の平坦面は粗い平面、④貫通した小孔の四点にまとめられる。

特に小孔がある特徴からは、紐を通しての使用が想定される。全体の大きさから装飾品や何らかの携行品の可能性が考えられる。また、どこかに吊り下げていた、何かを下げていたなども考えられることができる。

・スタンプ形土製品

全体の形等から、採集当初より縄文時代のスタンプ形土製品かその類似品のキノコ形土製品だろうと考えていた。これは縄文時代の後期ころの東北地方を中心に出土例があり、関東地方でも出土例が確認できる遺物である。

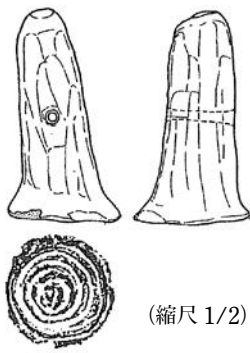


図2 スタンプ形土製品
〔藤岡神社遺跡〕より引用

スタンプ形土製品は名称のようにスタンプとしての用途が想定されている土製

品で、印面と考えられる部分に普通は文様が刻まれている。ただ何に捺印するかには諸説あるようで、身体に文様を付けるボディペイントの道具とする意見や、食品に模様をつけ装飾するために使用するとの意見もある。

遺物は、印面に相当する部分の整形が最も雑であり、文様も存在しないためスタンプとしての機能性は考えにくい。顔料などの付着も見られない。また、市毛遺跡は縄文時代前期とされ、スタンプ形土製品の盛行時期とは異なり、後期遺跡の存在は否定できないが周知の情報からは整合しない。粘土も縄文時代の土器などとは質が違いうようにも思える。これらからスタンプ形土製品の可能性は低いことになる。

・キノコ形土製品

キノコ形土製品は名前のおりキノコを模した土製品で、一目でキノコを象ったとわかる物もあれば、微妙なものも存在する。ただし、一般にキノコ形土製品には紐を通すような穴はあけられていないこの可能性は低い。

・装飾品

垂飾品と考えることも可能である。貫通した穴に糸を通し、重力に従って自然な状態になると平坦面がほぼ真下を向く。装飾としては雑なつくりであり、また地味でもあり見栄えはしなく垂飾品の可能性は低い。ただし現代的な考えを当てはめるのは不適当かもしれない。

・土器などの突起物



図3 甑
(高野寺畑遺跡出土)

貫通した孔にとらわれず形態から検討してみると、土器の突起物が剥離したものの可能性があらることがわかる。

古墳時代に使用された土師器の甑こしきなどの中には持ち手のような突起のあるものがあり、特に中型品につく取っ手のなかに似ているものがある。しかし剥落した取っ手である場合、本体に取り付ける際にはがれないように十分接着するはずであるが、本資料の平坦面や円盤部分周囲は剥離したようには見えないし、圧着したと思える痕跡は見いだせない。またそのような取っ手には小孔が開けられていることはなく、類例を探したが見つからなかった。

4 まとめ

ではいったいこれはなんだろうか。決め手に欠き答えが出せない「用途不明遺物」である。ぴったりの答えがないことから、本資料が完形ではなく何かの一部であるとの考えを支持する。祭祀に使用するものかもしれないし、想定以外の可能性も当然あろう。失われている部分が補われると、本来の機能が判明することになる。

十王台式土器が焼けてから

—土器の煮沸実験に窺う炉石の機能—

鈴木 素行



弥生時代後期、住居跡の炉址に付属する炉石が調理のための装置として、どのような役割を果たしたのか、土器を製作し煮沸に使用する実験を通して考えてみました。ささやかな実験ですが、その結果を受け入れるならば、熱効率の向上という視点だけでは、調理の火を理解できないのではないのでしょうか。

ぼんぼり山遺跡第2号住居跡の炉石

1 炉石という現象

那珂川流域における弥生時代後期の住居跡には、主軸線上で主柱穴が囲む空間の内側に炉址があり、中央よりもやや奥壁寄りに位置することが多い。炉址には据え置かれたような状態で礫が検出されることがあり、これを「炉石」と呼んでいる。炉石には、被熱による変色等が認められ、炉で使用されていたことは確実である(図1)。

例えば市内船窪遺跡群では後期「十王台式」に、炉址を形成する二九基の住居跡が調査されたが、炉石が検出されたのは一六基であり、全ての住居跡に伴うものではない。しかし、大洗町団子内遺跡「井上一九八七」や市内部田野山崎遺跡「井上一九九〇」において井上義安が、炉址以外から出土した礫についても法量と形態、被熱の痕跡から炉石を抽出したように、据え置かれていた炉石は撤去されることもあった。船窪遺跡群においては残存した炉石の多さから、むしろ、ほとんどの炉址に炉石の付属を想定すべきなのかもしれない。

井上は、水戸市大鋸町遺跡「井上一九八八」等の調査において、据え置かれた炉石の下にも焼土が形成されていることを炉址断面図に示した。炉石は必ずしも、炉の特定箇所に固定されていたわけではないと考えなければならぬ。茨城県内の炉石を集成した鶴見貞雄は、炉石の位置を、炉址中央の「I型」と炉址一端の「II型」に分類したが、これは、最終的に使用された位置の表現と

表1 船窪遺跡群住居跡炉石一覧表

遺跡	住居跡	石材	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)
半分山	2住	弱固結砂岩	281	105	82	1,728
半分山	5住	凝灰質砂岩	75	75	45	106
半分山	6住	砂岩	343	107	76	3,638
半分山	16住	凝灰質砂岩	224	111	69	1,187
半分山	17住	弱固結砂岩	240	60	40	350
半分山	21住	凝灰質砂岩	127	90	55	188
半分山	24住	砂岩	228	72	61	1,405
半分山	40住	砂岩	224	76	52	1,327
半分山	41住	砂岩	239	83	47	1,331
半分山	45住	砂岩	332	114	70	4,166
半分山	50住	砂岩	309	96	86	2,866
半分山	58住	凝灰質砂岩	111	97	62	461
ぼんぼり山	2住	石英斑岩	206	61	65	1,321
ぼんぼり山	3住	凝灰質砂岩	142	96	30	129
船窪	45住	凝灰質砂岩	354	133	65	2,336

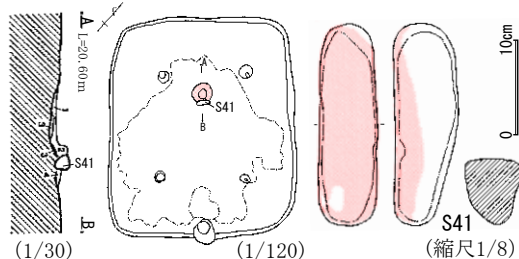


図1 ぼんぼり山遺跡第2号住居跡の炉石

いうことになるのであろう(鶴見一九九六)。一方で、船窪遺跡群のぼんぼり山遺跡第二号住居跡(図1)では、炉石の下に焼土が形成されていないことを確認している。この炉石は、三角形に近い断面形状で、頂点が下を向くように据えられていた。安定のためには、接地する炉床が調整されたはずであり、これに伴い焼土が削られたか、あるいは安定して据えられた位置を動かさないまま使用されたことが考えられた。この事例では、三角形の底辺に相当する平坦面を上に向けて据えられていることに注目したい。

船窪遺跡群の炉石について、攪乱により原形をとどめない一点を除く一五点を一覧(表1)すると、砂岩や石英斑岩という硬質の石材と、弱固結砂岩や凝灰質砂岩というかなり軟質の石材がともに利用されており、岩石の性状で選択

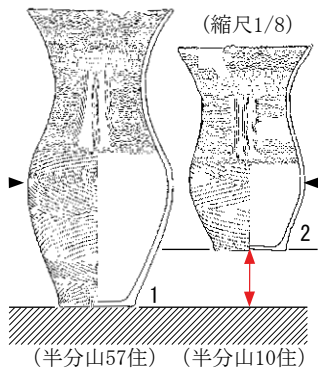


図2 煮沸具の中型と小型

煮沸具に
は、器高30
cm前後の中
型(図2の
1)と、器
高20cm前後
の小型(2)
とがある。

されたことは考え難い。長さにも75mmから343mmまでの広い範囲でばらつきがある。対して、幅と厚さには、まとまりを見る。幅は、61mmから133mmの範囲にあり、平均値は92mm。これは、煮沸具の底径の最大値に近く、炉石の上に土器を置くのに必要な幅の数値ではないかと想定された。厚さは、30mmから86mmの範囲にあり、平均値は60mm。炉石の上に土器を置いたとすれば、この厚さの分だけ炉床から高い位置で火熱を受けることになる。

2 煮沸実験前の仮説

炉石を据えて、炉床から高い位置に土器を置くのは、どのような理由によるのであろうか。

群馬県域の弥生時代後期「樽式」には、台付甕という器種があり、「脚部を付して被熱部分を高くするのは熱効率を上げるため」という視点から、次のような考えが示されている。「少量を煮炊きする小型品だからこそ、器高の高い他の平底甕と一緒に炉に置いて同じように火熱を受けられるように高さを調整するための工夫であったと理解したい」(天木一九九七)。「十王台式」の

3 煮沸の実験

炉石の機能について、このような仮説が成立するの、実験で確かめてみよう。そのために、「十王台式」の小型を二点、中型を一点模倣製作した。「十王台式」は、5mm以下を典型とする薄い器壁で製作されており、この器壁の再現を含む製作の方法については、別稿「鈴木二〇一四」に詳しい。本稿では、野焼きの様子と、焼成前後の色調の変化だけを紹介しておきたい(図4)。

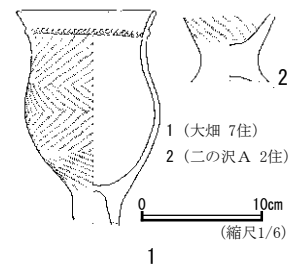


図3 「十王台式」の台付土器

これらの胴部最大径部分(黒矢印)までの高さの差(赤矢印)は6cmほどで、炉石の厚さの平均値に合致する。「樽式」での想定を応用すれば、中型と小型を一緒に置いて煮沸しようとする時に、小型が炉石の上に置かれたのではないかと考えられた。この場合、中型は炉の中央に、小型は炉石とともに炉の端部に置かれたことであろう。小型のみで煮沸する場合には、炉の中央に炉石が置かれたのではないかも想像された。さらに、「樽式」を真似て脚台部を付属させた土器が茨城町大畑遺跡(図3の1)や水戸市二の沢A遺跡(2)など稀に見られるが、これが「十王台式」に定着しなかったのは、同じ機能を炉石が果たしていたとも思われたのである。



「十王台式」は、野焼きと呼ばれる方法で焼成された。今回の焼成では、破裂による欠損を防ぐために、土器を充分に温め乾燥させてから火中に置くことにした。これが製作実験[鈴木2014]との変更点である。

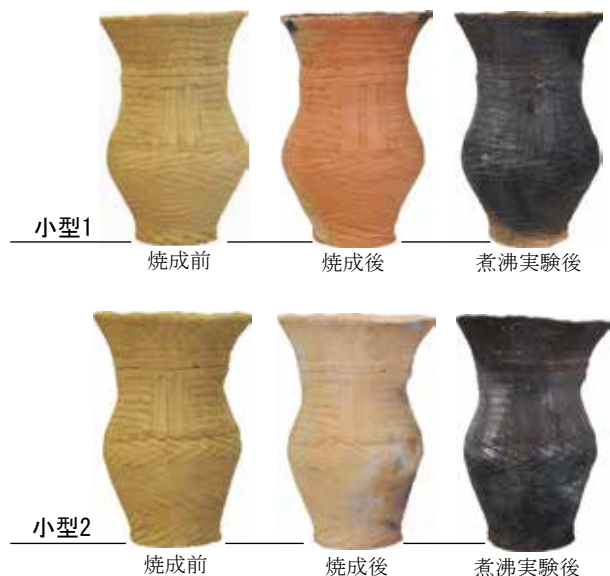


図4 土器の焼成実験と色調の変化

(縮尺1/6)



図5 土器の煮沸実験と底面の変化

製作した小型1・2は、焼成後の器高がともに185mm、頸部の括れまでの容量が750ccほどであった。中型は、焼成後の器高が333mm、頸部の括れまでの容量が3600ccほどであった。個体差は

あっても「十王台式」の中型と小型には、四五倍の容量差を考えて良いのであろう。

焼成後の土器は、水を入れると器壁を浸透して漏れる状態にある。土鍋の「めどめ」に倣って、煮沸実験の最初には、米の研ぎ汁を使用した。小型1と中型を地面に、小型2を厚さ6cmほどの礫上に置いて、土器の周囲で薪を燃して沸騰を待つ。すると、沸騰した順番は小型1↓中型↓小型2という結果であった(図5の右ない)。

その後も、地面に置いた小型1と、礫上に置いた小型2の比較について実験を繰り返したが、小型1よりも早く小型2が沸騰することは

なかった。当初の仮説は棄却せざるを得ない。

4 土器底面の色調の変化

実験を繰り返した小型1・2を観察すると、色調に違いが見られた。ともに器外面に多量の煤が付着し、全体的に黒色を呈するが、地面に置いた小型1の底部付近には、色調が変化しない部分が残る(図4の右)。また、小型1は底面にも色調の変化が見られないのに対して、小型2は底面にも煤が付着し黒ずんでいる(図5の左)。煤は炎の先端から発生することから、底部が接地した小型1の底面及び底部付近に、これが付着することはなかった。対して小型2の底部は、煤が発生する位置にあり、土器の底面が礫と完全に密着しているわけでもないことから、これが付着することになったと考えられた。

5 「加曾利E式」の土器の底面

煮沸実験の土器の底面に見られた色調の変化について、遺跡から出土する土器にもこれが認められるのか、まずは、縄文時代の土器を観察してみた。対象として選択したのは、市内の津田天神山遺跡「伊東・川崎一九六六」から出土した縄文時代中期「加曾利E2式」の深鉢形土器である(図6)。「V号pit」の出土遺物としての報告されたが、これは、住居跡の炉址を中心とした遺構で、後に館出遺跡や大房地遺跡などでも調査されることになる石囲炉であった。「石組みの中の焼土がつきる部分より約5cmさがり底面に接して加曾利E式土器が横倒した形で発

見された」と記載されており、炉址に伴い検出されている。土器は、ほぼ完形に復元され、器高37.5cm、口径29cm、底径9cmを測る。器外面は、胴下部が赤化、胴上部から口縁部までが煤の付着で黒化しており、煮沸具としての痕跡を残す。安定した平底を炉床に接地させて使用したものと考えられる。これを観察してみると、底面に変色は認められなかった。

6 「十王台式」土器の底面

「十王台式」の底面の観察にも、完形に近い状態の土器が望ましい。それは、法量や形態から器種が確定できるとともに、破片に分割した後に火熱を受けた可能性を排除できることによる。

小型の細頸形(図7の1)は非煮沸具であり、



(津田天神山) 0 10cm (縮尺1/6)

図6 縄文時代の土器の色調

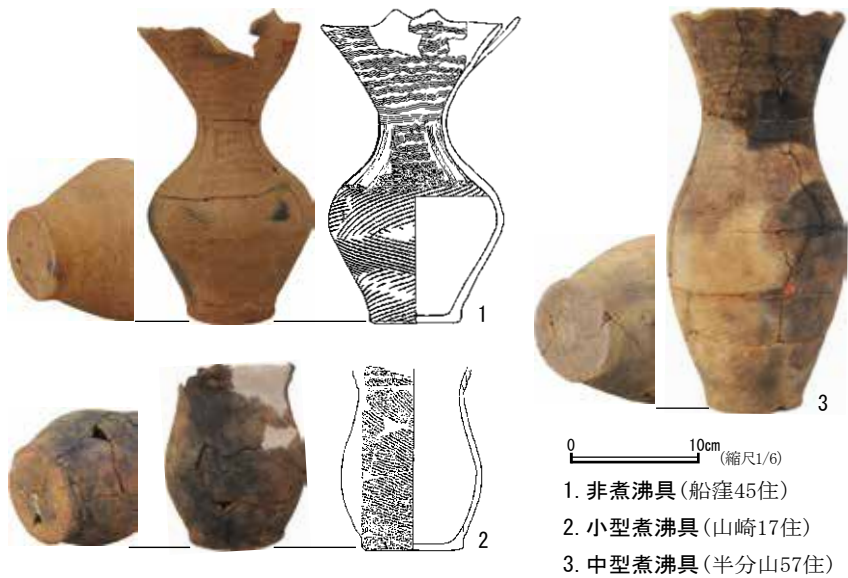


図7 「十王台式」の底面

から口縁部にかけては多量に、部分的には胴下部にも煤が付着する。底面にも煤の付着によると考えられる黒ずみが見られた。

底面の色調の変化は、非煮沸具には認められず、煮沸具にのみ観察された。煮沸具では、小型に限らず、中型にもこれを認めた。底面の色調の変化が、土器を炉石の上に置き使用することで生じたとするならば、この使用法は、煮沸具の全てに適用されたと考えなければならぬ。今回の煮沸実験の結果は、炉石の上に土器を置いたという想定のみを支持し、特定の法量の土器に対応するという想定を否定することになったのである。

7 煮沸実験後の仮説

「十王台式」の薄い器壁は、煮沸具として熱効率の良いものであったろう。さらに熱効率を向上させる装置として、炉石にその機能を想定したわけであるが、煮沸実験は相反する結果を示した。「強火」ばかりに注目しすぎたのであろう。これは、「弱火」や「とろ火」も含めた調理の火として検討すべきと考えるようになった。炉石は火力の調整のために機能したのではないかと、現在では想定している。炉石の端部に炉石が据えられるのは、土器の片面だけに離れた火熱を受けることを考えて良いのかもしれない。そのような装置が弥生時代後期に成立することについては、煮沸具の容量が極端に小さくなったこと、穀類が調理の主な対象となったことに起因するのではないかと想像している。

「十王台式」の最後期の土器と、古墳時代前期

の外来の土器が共存する市内の武田石高遺跡第五号住居跡までは、炉石に炉石が据えられていた。それが古墳時代前期でも、外来の土器群のみで集落を構成する三反田遺跡になると、炉石は姿を消すことになる。三反田遺跡では、S字状口縁台付甕など脚台を付属させた甕が煮沸具の主体を占めている。脚台部の付属は熱効率の向上を目的に説明されているが、これも、調理の火に「強火」だけを考えてはいないであろうか。

土器の煮沸実験には、菊池 繁氏・菊池順子氏・篠原とよ子氏よりご協力をいただいた。お礼を申し上げます。

引用・参考文献 伊東重敏・川崎純徳一九六六「津田・天神山遺跡調査報告」勝田市教育委員会／井上義安一九八七「団子内」大洗町団子内遺跡発掘調査会／井上義安一九八八「水戸市大鋸町遺跡」水戸市大鋸町遺跡発掘調査会／井上義安一九九〇「那珂湊市部田野山崎遺跡」那珂湊市山崎遺跡群発掘調査会／大木紳一郎一九九七「弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団／鈴木素行二〇一四「十王台式土器が焼けるまで—土器の製作と焼成の実験が辿り着いた『その先』—」『茨城県考古学協会誌』第二六号／鶴見貞雄一九九六「炉石住居覚書」茨城県の弥生・古墳時代住居例から」『研究ノート』五号

追記 弥生時代後期の千葉県安房地域にも、「炉石」あるいは「炉石」とも呼ばれる礫の設置が見られる。これは、礫の形状や埋設の状態が茨城県の那珂川流域と異なり、本稿の「炉石」とは別な機能が考えられよう。

三反田遺跡第11号住居跡のS字状口縁台付甕

供献具と推定する器種である。全体がほぼ焼成後の色調のままであり、底面の色調も変化していない。なお、同じく非煮沸具であり、貯蔵具と推定する大型の細頸形についても観察したが、やはり底面の色調は変化していない。

小型の太頸形(2)は煮沸具であり、器外面のほぼ全体に煤が付着する。底面にも煤の付着によると考えられる黒ずみが見られた。中型の中頸形(3)も煮沸具であり、器外面の胴上部

文の文 センターの日 2014 後期

10月

4 えみし学会見学 / 5 埋文ウォーク / 7 藤井むつ子氏資料調査 (市指定工芸品 江戸時代 木琴・扁額) ↓



7 台風被害 ↓



7-10 田彦古墳群試掘調査 / 10 側溝掃除 / 15 日立市豊浦支所民生委員研修会 / 18 ふるさと考古学



⑨ 「土器の考古学2」(講師・綿引逸雄氏) (上段左写真) / 24 十五郎穴横穴墓群確認調査開始 / 29 中根小学校1年生どんぐり拾い / 31 虎塚古墳一般公開 / 文化庁虎塚古墳視察 / 朝日旅行見学 / 平磯小学校出張授業(勾玉づくり) ↓



11月

1 ふるさと考古学⑩ 「壁画の考古学」(講師・堀江武史氏) / 1-3 虎塚古墳一般公開 / 2 クラブツアー / ズム見学 / 5 日立市塙山ワイワイ楽習会见学 / 6 栃木県野木町教育委員会見学 / 6-9 虎塚古墳一般公開 / 7 阿字ヶ浦小学校6年生社会科見学 ↓



7-3 反田小学校6年生社会科見学 / 8 高崎市遺跡を掘る会见学 / 毎日新聞旅行見学 / 駅からハイキ

ング見学 / 市内小中学校学習会 / 講座室利用 / 9 ワンケースミュージアム34 「日立からきた砥石」終了 / 11-14 金上埴遺跡試掘調査 / 11-12 勝田第三中学校2年生職場体験 / 12 前渡小学校特別支援学級見学 / 16 東京都歴史教育研究会見学 / 18 かすみがうら郷土文化研究会見学 / 20-21 大島中学校2年生職場体験 ↓



22 ワンケースミュージアム35 「市内遺跡の調査2014」開始 / 23 ふるさと考古学⑪ 「フィールド探検」(講師・矢野徳也氏) ↓



26 宮下寛氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団)資料調査「武田遺跡群炭化草鞋」 / 28 田彦西原遺跡試掘調査開始 / ミュージアムパーク茨城県自然博物館第

虎塚古墳 花便り

14 ユキノシタ

梅雨間近の六月初め、虎塚古墳から十五郎穴横穴墓群へ向かう小道の脇で、小さな白い花の群れを見かけました。それが今回ご紹介するユキノシタです。この花は、ユキノシタ科ユキノシタ属の植物で、高さは50cmほどになる多年草です。花は五弁で、上の三枚が小さく濃紅色と濃黄色の斑点があり、下の二枚は白色で大きく細長いのが特徴です。名前は、雪が上に積もっても、その下に緑の葉があることから「雪の下」と名付けられたとする説や、白い花を雪(雪中)に見立て、その下に緑の葉があることからする説などがあります。

虎塚古墳が雪をまとったことは一年間に二、三回しかありませんが、雪が積もったときには、「雪の下」を覗いてこの植物を探してみようと思います。(稲田健二)



2011.6.3

62回企画展「マンモスが渡った橋
—水河期の動物大移動」へ資料貸出「後野遺
跡細石刃ほか」／30館内清掃お世話に
なり
まし
た」



12月

2 田彦西原遺跡試掘調査終了／4
東石川小学校5年生校外学習／
山田康弘氏（国立歴史民俗博物館）資料調
査・写真撮影 「三反田観塚貝輪をはめた人
骨」／「ふるさと考古学」⑫「楽しい
楽しい考古学」（講師・さかいひろ
二氏）／「滋賀県立安土城考古博
物館より資料返却」三反田観塚ハート形
土甕／13 NHK文化センター見
学／16 明治大学博物館企画展「馬
渡埴輪製作遺跡」へ資料貸出「馬渡
埴輪製作遺跡埴輪」／16-19 平井遺跡試
掘調査／26 岩宿博物館より資料
返却「器ほか」

1月
16 ワンケースミュージアム35終了
／21 岩橋由季氏・米元史織氏（元
州大学大学院生）十五郎穴横穴墓群ほ
か人骨調査（下段右写真）



28 堀口遺跡試掘調査開始

2月

4 堀口遺跡試掘調査終了／二第
12回企画展「古墳時代前期のひた
ちなか」—「十王台式」後の世界—
開始／12-17 平磯長堀南遺跡発掘
調査／21 ひたちなか市の考古学
第8回①「ひたちなか市の古墳時
代のはじまり」（講師・稲田健一）
／24-27 愛宕神社古墳試掘調査
／27 国立歴史民俗博物館企画展
へ資料貸出「三反田観塚貝輪をはめた
人骨」／28 ひたちなか市の考古学
第8回②「房総と古墳のはじまり」
（講師・小橋健司氏）

3月
6 磯崎東小学校5年生出張授業「勾
玉つくり」／「ひたちなか市の考古学
第8回③「群馬県地域における古
墳時代のはじまり」（講師・深澤敦
仁氏）／10-12 寄居新田遺跡試掘
調査／13 平成26年度市内遺跡発
掘調査報告書」発行／14 ひたちな

入館者状況 (2014.10.1～2015.3.31)

月	開館 日数	個人		団体		計 (人)
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
10月	27	277	5 (0)	105 (0)	382	
11月	26	1054	16 (7)	355 (97)	1409	
12月	23	85	4 (1)	125 (6)	210	
1月	23	97	0 (0)	0 (0)	97	
2月	24	120	3 (0)	124 (0)	244	
3月	26	581	7 (0)	185 (0)	766	
合計	149	2214	35 (8)	894 (103)	3108	

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び
(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公
社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び
下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

25 国営ひたち海浜公園特別展へ
資料貸出「沢田遺跡柄振ほか」／26-29
虎塚古墳一般公開／31「埋文だよ
り」第42号発行



館出Ⅶ-3号墓



か市の考古学第8回④「古墳時代
のはじまりの社会」（講師・北條芳
隆氏）／第7回記録集「古代土器の
生産と流通」発行

編集後記の
笑つ埴輪

我が家にネズミが増えた時期があった。あ
る夜には布団からはみ出ていた足の指を齧ら
れた。これはひどく痛かった。おちおち眠っ
てもいられなくなったので、強力な接着剤の
付いたネズミ捕りを買ってきて仕掛けた。面
白くように捕れたのは、ほとんどが子ネズミ
で、親ネズミは用心深く、なかなか罠に掛か
らない。攻防の末にやっと捕らえた一匹は、
茨城県自然博物館でクマネズミと同定してい
ただき、センターの骨格標本へと献体した。
これは、土器に残るネズミの齧り痕を考察す
るための参考資料として、早速に活用された。
武田遺跡群で検出された縄文時代の陥穴は、
規模が小さいので、狩猟の対象はタヌキであ
ったかなどと考えたこともあった。しかし、
ネズミとの攻防で学んだのは、幼獣は罠に掛
かりやすいが、成獣は難しいということ。追
い立てるなどで注意を散漫にしなければなら
ないのだろう。一方で、ただ掛かるのを待つ
だけならば、幼獣に見合う大きさの陥穴でよ
いという考えも成り立つ。貝塚から出土する
動物骨について、種類だけでなく年齢構成ま
で調査するには、さまざま
な成長段階の骨格標本が必
要だ。というわけで、今年
度もまたタヌキやイノシシ
を手に入れては埋めるので
あった。



ひたちなか埋文だより 第42号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2015年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市申根3499 電話 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 弘美印刷株式会社

